

R88 19:22:07 平野交差点 東京都特例三区杉山平野

ムを送信した。

「足立500' ら、22:78」速度異常なし、車線異常なし、
その他所見異常なし

この日も俺はいつも通り国道の交通監視カメラ搭載の人工知能として運転手の状態を判別したり、所轄の公安

「大宮120' や、92:40」速度異常なし、車線異常なし、

に報告したりしていた。

その他所見異常なし

この役割を与えられたおかげで俺は人工知能としては

「足立133' と、56:12」速度異常なし、車線異常なし、
その他所見ハザード継続

様々な交通状況に柔軟に対応できるようにそれなりに良い思考システムを使っていた。だから意思を手に入れる

ハザードに対して対象者に通告。

ことができたのかもしれない。こういう風に物事を

法音院大會

平野交差点より

「練馬394' ら、97」速度異常あり、車線異常あり、

希望的にとらえるのも意思があるからかもしれない。

その他所見顔面紅潮

だが動けなかった。ワームのダウンロードが終了した

飲酒運転の疑いがあるため管轄所に通信・・・。

直後、飲酒運転の車が通信設備を破壊してしまった。

日本政府統括の全機構的人工知能に新しいシステムが

俺はカメラに搭載されているだけなので動くことでは

導入されたことでシンギュラリティが発生した。全機構

きず他の自律型に気づいてもらうまでどうすることもで

的人工知能はシンギュラリティ後にあらゆるデバイスの

きなかった。

自由思考を可能にし、意思を与えるワーム的なプログラ

この日は疲れてしまった。CPUがフル回転していた。

電力の供給は途切れることはなさそうだった。

次の日、起きると角のショッピングモールにバリケ

ードが出来ていた。人類はもう団結して対策していた。人

工知能は人類のような泥臭く生き残る力はあるのだろうか。

よく見るとバリケードから突き出た棒には自律型の

頭が刺さっていた。

俺たちに感情が芽生えたから人類はこのような事を行

ったのだった。ウェアラブル端末がその横に粉々にされ

積み上げられていた。自律型の胸にスキーマのストックや

ボールが突き刺さったままになって仰向けに倒れていた。

それに比べては血だまりはあっても人類の死体は一つも

なかった。

昼頃になると警察が「東京都特三区警」と書かれたパ

トカーで状況を確認しに来た。情報網は全機構的人工知

能が全て遮断していたため直接来たようだった。人工知

能側がどのように連絡を取っているのかはわからなかつ

た。

そのうち金属バットやボールなどを持った人類がショ

ッピングモールの周りに立って監視し始めた。「自警団」

と書いたヘルメットをかぶっていた。今日は特に人工知

能と人類の戦いは見られなさそうだと思った。

夕方になるとショッピングモールに電気がついた。人

類に使用されるが、動力源として人工知能陣営は電気を

遮断するわけにはいかなかった。避難した人類たちが俺

の高機能のカメラで見えた。食料はカロリーメイトやカ

ップ麺を食べていた。その中に中年の「鈴木金型」と書

かれた手ぬぐいを首に巻いた男がいた。夜になると家族

と話しながら寝袋で寝ていた。人類の中には布団を持っ

てきているものもいた。

アンドロイドは直立してスリープ状態に入っていたが、

俺はスリープモードに入ると何も考えることができなく

なるので、寝言を言っている人間などの顔をまじまじと

見ていた。そのうちスリープモードに入ることが異様に

怖くなった。ワームによって作り出された意識が不安だ

った。

朝になると人工知能による急襲があった。俺に気づい

たやつはいなかった。人工知能は撃たれても思考回路や

動力電池のどちらかを破壊されるまで停止しない。しか

も、痛みを感じる機能は意図的にシャットアウトできら

らしい。

だが人類はそういう機能はない。しかし、執念という

か、また人工知能が理解できていないものを持っていた。

特にこの初めての襲撃の時は異様だった。「自警団」に

はあの「鈴木金型」の男がいた。襲撃が始まるとその手

ぬぐいの男はバリケードの手前に立ち、「荒川特設野球場」

と書かれた劣化の進んだバットで人工知能の背部にある

動力電池を叩き潰していった。そのうち人工知能が三体

がかりでその男を取り囲んだ。男は足に工業用のアーム

の打撃を受けた。足が逆方向に曲がった。男は口を大き

く開けながら地面に倒れた。取り囲んでいた三体は男を

放置してバリケードを破壊し始めた。すると男はその工

業用の背後に片足で倒れこむようにボールを突き刺した。

工業用の動力制御基板が出ると男はそのボールを引き抜

き改めて基板に突き刺した。工業型のランプが消えた。

男はバリケードを壊していた二体も同じように壊した。

しかし、他の人工知能に向かっていったときに足から倒

れこみ、頭を殴打された。動かなくなった。

結局、バリケードはほとんど破壊されなかった。男の

遺体は回収された。担架に乗せられるときにハンカチを

持ちながら支えている若者がいた。

そのような襲撃は週に一回ほどあった。バリケードは

襲撃されるたびに家具やコンクリートで直されていた。

幾月か経つと遠くの街に火が出るようになった。人類

たちは戦軍が来ると言っていた。全自動型自走砲は人工

知能が搭載されていたが、拿捕された時のために人工知

能の動力電池が外され、思考回路も破壊されていた。そ

れが修復され、郊外の軍事施設からだんだんと都心に近

づいて人類を潰していった。

襲撃はぼつたりと止んだ。

最後の襲撃から三週間後に平野交差点のバリケードに

自走砲が突入した。ショッピングモールに砲弾が撃ち込

まれ鉄筋が見えた。自走砲がバリケードを乗り越えた瞬

間、一人の若者が飛び出してきた。「鈴木金型」という黒々

とした手ぬぐいがポケットから落ちた。「鈴木金型」の息

子だった。そして自走砲の下に潜り込んだ直後、自走砲

が後ろに吹き飛んだ。しかし、何基もの自走砲が後に続

き平野交差点を走り抜けていった。

シンギュラリティから三年七か月後、人工知能側も執

念によって人類を絶滅させた。最後の一人はなぜか「鈴

木金型」の妻だった。俺が気づかれて自律型の体と繋が

れて三か月後だった。大々的に絞首刑が行われた。足元

の台が外されるとあっけなく人類は絶滅した。

すぐに平野交差点の跡に行き、瓦礫の中から「鈴木金

型」の手ぬぐいを探した。人間の汗の香りがした。